

せ た か む い

発行 古平町史編纂室
文化会館 842・2590
第189号 平成17・6・1

年表で読む

古平の歴史

《95》

カレイ漁 ①

■オヒョウの怪物を釣る

古平のカレイ漁の記録としては、明治二〇年の「北水協会報告書」二月号が最も古い。

「二月二十一日、後志国古平郡入船町の本間金松が鰯釣りに出掛けたところ、丈八尺五寸（二・八ど、身の厚さ一尺三、四寸（三九〇四二））、目方がおよそ三〇貫余り（一一三・三）あるオヒョウを釣ったという」とある。

ところが、それから七〇年余り経った昭和三五年二月二十四日のこと、当時、港町本間実さんが所有する明栄丸のカレイ刺網に、身の丈二・三ど、目方が一七〇＊という超特大の

オヒョウがかかり、開町以来の大物と話題になった。（先のもとの身の丈・目方の表示に違いがあるようですが記録にあるまま）

これだと、かげぶとんを四、五枚重ねたような超大物である。古平町内では大評判になったが、まだ、テレビも普及していなかったから広く知られることはなかったようである。

当時だとカメラ愛好者も多かったのに、その写真が一枚も無いのも残念なことである。

■古平のカレイ漁

北海道でのカレイ漁の始まりは明治一〇年以降とされている。古平では鰯釣りのときカレイもかかっていたが、カレイ漁のはじまりは延縄で行なわ

れていた。

明治三二年、北海道史編纂さんのため古平町について調査をしたとき、古平の鰯漁について次ぎのように記している。

「鰯釣りは越後地方の出稼ぎ者が多く、鰯釣りは一隻の船に七人が乗り、親方という資本主がいて、米、みそなど一切の仕込みを受け、その漁獲高を一〇人で分け、船と道具に一人分、資本主に二人分、あとの七人分を漁夫に配当する。一隻の船で六百束（一万二千尾）を漁獲すれば収支がつぐなう」とある。

この様子から、古平ではまだカレイ漁は行なわれていなかったと考えられる。

延縄のあと刺網が使われるようになり、ミゴ縄（稲わらのし）でなった縄で編んだ網を使っていたが、明治の末、沢江村の保木桑蔵が、木綿糸の網を本州から持って来て良い成績を挙げたので、その後はこの刺網を使用するようになった。漁期は一二月上旬から翌年三月下旬の鰯漁の始まるまでで、五〇日間程度出漁していた。

■カレイとヒラメ

どちらもよく似ていて、その区別だが、よく言われるのは「左ヒラメに右カレイ」、どちらも生まれたときは左右に一ずつ目がある。ヒラメは右目が左目に少しずつ近づいていき、カレイはその反対である。体長が一丈ぐらいのときから移動が始まり、一丈ぐらいになると終わるといふ。何のために両眼が片側に寄らなければならぬのか。それは海底にくつくようにして生活するためで、カレイもヒラメも海底の砂に体をつけて隠れている。体色は砂の色に似ていて、近寄ってきた魚を捕まえて食う。そのためには体が平たい方が隠れやすく、砂についている側は見えないので目も必要がない。それで目を上側に移動させて、より餌を見やすいようにしようというわけである。ではこの仲間には皆そうかといえは、何にでも例外があるようにその逆のものも結構ある。目のある黒っぽい方が表で、白いきれいな方が裏である。（この稿・続く）

大正十三年

▼一月一日

大正一三年の年を迎えた。無事にこの年を過ごさんことを神に念ずる。七時起床。礼服を着て新地郷社に参詣する。帰り正

邦。司。命。傘。半。固。などに寄る。昨日に引きかえ今日は寒さもゆるむ。雪も降らぬ静かな天気だ。帰ってからもちを食べ。学校の拝賀式に参列。一

時から交礼会がある。年末は三日も時化が続いて魚がとれなかつたが、今日は九時頃から皆出漁した。夕方、カレなどが揚がる。学校から帰り近所へ年始に寄る。終わって明日のクジの支度などして一〇時休む。

▼一月二日

初売り当日、午前六時に起きた。六時半に開店する。本年は一般客が少ないので何となくさびしい。坂下さん、民さんらが手伝いに来る。客はこの頃になく不足だ。売り上げ高は昨年と同額ぐらい九二〇円程ある。刺

網六、七〇〇間、アバ縄二五丸程が出た。朝の内は五、六〇〇

円ぐらいと思っていたが、意外の上首尾であった。刺網は八円売り、中、細アバ縄は三円六〇銭売りだ。綿糸は三〇〇円の相場。夜、五時頃から電灯が消え、朝までつかなかった。

▼一月三日

起床九時、昨夜の後始末をする。入船町方面から注文のあったアバ縄など、坂下馬車屋を頼んで届ける。熊さんも一緒に乗

高野名幸作さんの日記から

[100]

当時の世相を見る

つて行く。アバ縄は新しいのが入らぬうちに精々売り込みをかいねばならぬ。年始の客もポツ

中央政界ではなかなかやかましいようだ。

▼一月六日

午前より幾分暖かい。子供等はタコ揚げに浜へ行く。風の具合がよく、タコもよく揚がる。幸治、トミ、悦三までも来る。午後からもまたタコ揚げだ。自分等も子供の頃はすいぶん揚げ

▼一月四日

正月も早や四日となった。店は閑散となった、子供等は学校

当時のことを考えると楽しかったものだ。

が休みなので、タコ揚げなどして遊んでいる。父は新地方面へ年始に行き九時過ぎ帰る。夜、阿波君が年始かたがた遊びに来る。いろいろ時事について話し、一〇時に帰る。国許の傘の方も財産整理のことなどあり困ったことだ。母様もさだめし心配して居られることならん。

▼一月五日

清浦内閣組織のことにつき、

た。聞けば昨夜、長尾床屋さんが亡くなったとのこと、気の毒だ。また④では三八歳で初子を生んだとのこと、これはめでたい。夜、本に遊びに行き一〇時に帰る。

▼一月七日

起床八時、今日はすでに七草になった、松飾りもお供えも下げた。店は閑散、コタツにあたる。年賀状は二四、五通も来たか。ハガキが局で品切れで出ることができない。正午頃から大吹雪となる。夜、幸治、文治、吉治、トミと五人で百人一首のカルタ取りをやる、私は読み役だ。私らも二〇年くらい前はすいぶんやつたものだ。今は少しもやりたいと思わぬ。

▼一月八日

今日は寒暖計が二二度F(零下五・五度C)、今冬一番の寒さだ。吹雪で店も閑散、午後銀行へ行き、帰途、司に寄り、話をして四時帰る。時化ている。清浦内閣の親任式が赤坂離宮で行われる。

(各大臣名があるが省略)

▼一月九日

昨日よりは寒さがゆるんできた。長尾床屋さんの葬式、まだ四六歳というのに気の毒なことだ。店は寺田から刺網千間、ほかアバ縄も出た。㊤おつかさん病氣療養中のところ、昨晚死亡されたと通知がある、父がお悔やみに行く。八時頃から雪が強く降り出し、一時間程で一尺も積もる。

▼一月一〇日

朝から吹雪が激しく、板戸も閉める。熊さんは㊤へ手伝いに行く。店は閑散。夜、父は通夜に行く。

▼一月一一日

今朝も寒い、二二度F、床に就いていても鼻や耳が冷たい。昨日からの吹雪が止まぬので、店の板戸は閉めたままだ。㊤おつかさんの葬式で父が行く。今夜㊤ではムコ入り祝言があるとのことだ。

▼一月一二日

起床七時、少し暖気になった。店は刺網、アバ縄がポツポツ売れる。刺網の競争で八円に売っていたが、今日、会社から八円二〇銭と通知が来た。仕方なく

明日から八円五〇銭で売ることにした。妻は新地方面へ年始かたがた出掛けた。夜、子供らはカルタ取りをして遊んでいる。

▼一月一三日

長らくの荒れた天気も今日は全く晴れて上天気。雪下ろしや雪引きをやる、出面も頼んで六人でやる、ずいぶんはかどった。午前中子供等は浜へタコ揚げに行く。カレは東京方面で値段がよいというので、市場でもずいぶん高く売れているとのことだ。夜、子供等とカルタ取りをする。

▼一月一七日

天気快晴。今日は妻の三三年の祝いというので、朝から港町の姉や一枝さん等が手伝って、支度に一生涯懸命だ。昨夜一時頃、熊さんのところへ国許の老父が重病との電信が入り、今朝九時の汽船で、急いで国許へ向けて出発した。文治は足の怪我也ようやく良くなり、今日から学校へ通う。

▼一月一八日

今日も妻の年祝いのあと引き祝い、㊤梅野、㊤支店、㊤司、虫の婦人方が五時頃集まり、い

ろいろ談笑しながら九時頃終わった。

▼一月一九日

起床八時、坂下馬車屋、鎌田さん等が来て雪引きをやる。天気快晴だ。小樽から注文していたカレ縄六千間が入荷する。大アバ縄二〇丸〇へ届ける。私は㊤の倉へ行き、坂下馬車屋に運んでもらう。網も品切れ中であつたのでよかった。カレ縄

この頃大漁なのに加えて値段もよいので、ひとナギで二〇〇円から三〇〇円ぐらいにもなるといふ。漁夫連も景気が良い。浜方の景気の良いというのはわれわれにも良いのだ。アバ縄一〇丸出る。一〇時頃、新編から電信が来て老父が亡くなったと定だつたのに残念なことをした。

▼一月二〇日

田社員が来たので昼食を出し、店の用向きを話した。今日は火防組合の慰労会があり、午後三時、堀ビヤホールに集る。表彰の後、宴会が始まる。芸者も六、七人来てずいぶん賑やかだ。八時頃に散会する。熊さんから

電信が来た、老父の死に目に会えず残念だつたらう。

▼一月二二日

天気快晴。熊さんがいないので店の方も忙しい。二時頃ようやく昼食をした。カレ縄大漁のところへ鮮魚の値段がよいので、浜はずっと景気が良い。幸治は学校での予習が終わったので、新地山の上の学校まで習いに行っている。

▼一月二三日

起床七時、鎌田さんが毎日来て雪かきをやってくれる。店は二〇日頃から急に忙しくなつた。昨日も刺網二〇〇〇間、今日は四五〇〇間も出た。この分だとあと四万間は売れるだろう。手持ち一万間程と昨日今から買った一万間、東洋の一万間、今日また一万間注文したので、合計四万間を手当てしておけば大抵間に合うだろう。今日から現金八円八〇銭、延払い九円八〇銭にした。午後三時頃から急に暴風が吹き時化になる。カレ縄船などが帰港した後でよかった。この頃、カレ縄の大漁が続いて景気が良い。

▼一月二四日

店の方は相当に忙しい。海は大時化で寒風が吹く。アバ縄が売れる。夜は帳簿整理の方も忙しい。

▼一月二六日

今日、東宮殿下が良子女王殿下とご婚儀の盛典を挙げられる。実におめでたいことだ。九時、学校の拝賀式に参列、終わって青年団、在郷軍人会、生徒達の旗行列があり、新地の郷社前で万歳を唱え解散する。後、郷社社務所で祝宴を開く。折詰に酒が出て、万歳を唱えて祝い、一二時に終わる。③で昼食を馳走になり二時帰る。珍しい好天気だった。

▼一月二七日

昨日は良い天気だったが、今日は寒風が吹き海は時化になった。店は二、三日前からみればヒマだ。古英丸が入り、下山口から実子縄八個、夕からの八個、ほか田から二個来た。佐渡の稲垣の主人が亡くなったと電信が来たので、早速電報を打った。

▼一月二八日

今日も朝から寒風が吹き海が

時化になった。刺網は二、三日

前から割りとうるようになった。アバ縄は一〇丸も出た。まだ古平へは直航の品物が着かぬ。来月の一日頃になるだろう。余市セでは着いたということ、沖村方面へ多少の売り込みがあったらしい。一日中沖風で寒い。家屋一棟が信用組合に抵当に入っているのを、今日三七八円で買い受けた。

▼一月二九日

一〇時頃から新地方面へ集金に出かけた。入船町から丸山町へ廻る、網キウリで忙しそう。入船町から港町一帯は今日もカレ網が大漁。多いところは五〇箱、少なくとも二〇箱くらい。値段はよいし、カレ網連は近年にない水揚げで大喜びだ。今秋はカレ網が相当に売れるだろう。

夜、舎へ度量検査員が来ているので帳簿を持参する。いろいろ話をし八時帰る。佐渡の安藤から古平行きがあるとの電話があったので、改良縄一五個注文した。

▼一月三〇日

起床八時、浜へ出て見る。珍

しい上ナギで春先のようだ。雪

が降らなくて天気がよい。早や鯨場が近づいたような気がする。朝の船で一枝さんが小樽へ帰るので浜まで見送る。午前中、店で帳簿の整理をする。午後から集金かたがた浜町、沢江方面へ出かける。刺網の家ではどこでもタナ掛けに一生懸命だ。トワインは今年から売り出したが、ずいぶん流行した。細アバ縄は七、八分通り売れた、これから中アバ縄の時期だ。金、平沼、菊地船頭、その他のところに寄り六時帰る。暮れからみるとよほど日が長くなった。

▼一月三一日

今日も快晴、カレ網は毎日のナギ続きで、しかも大漁なので相変わらず景気がよい。今秋は大いに期待できるので、得意先廻りをして注文を受けねばならぬ。帝国議会解散する。中央政界は混乱している、嘆かわしいことだ。

▼二月一日

快晴、そして風も無く静かな空だ。新地方面まで掛取りに出かけ、のち美国へ行く。新地山

の上の成田山、学校などが建っ

てから初めてだ。④に寄っている話す。昼食を馳走になつているところへ古平から電話がくる。今朝五時、積丹丸が美国のカタギリ石沖で遭難したとのこと。家の網一個積み込んであるから調べてくれとのこと。早速、市川に行き聞くと、古英丸、末広丸、その他の船が出て、ハシケの人夫も五〇余名で荷物を揚げ中とのこと。この分だと荷物は全部揚げられるという。④、本間、山本などに寄り、六時頃帰宅す。刺網二〇〇〇間程が出た。

▼二月二日

起床八時、熊さんが不在なので、鎌田さんが来て雪投げなど手伝ってくれる。店もなかなか忙しい。⑤熊木の紹介で、厚苦の長谷川へ刺網ほか付属品など三〇〇円余り出る。二月は忙しいので、精々勉強せねばならぬ。カレ網は今日も大漁、佐渡赤泊から秩父丸が入港、外内、⑥、⑦、⑧、⑨、美国⑩などへ合計三百個程の荷物が着いた。この分だと、これからは相当に競争が激

しくなるだろう。八時頃から吹雪で時化になった。積丹丸はまだ引き下ろしてないのだろうか。荷物はほとんど陸揚げしたらしいが、この時化では破船になるかも知れない。

▼二月三日

昨夜一〇時頃から吹雪はいっそう激しくなった。今朝もなかなかひどい。美国山中で座礁した積丹丸は、この時化では粉碎したろう。店でもこの大吹雪で、戸板三枚分だけ開けている。店は今朝も刺網三〇〇〇間程が出た。あと二万五千間程は手当てしてあるが、この後、一万五千間はぜひ売りたいものだ。向かいの電気会社で戸外に、大きな赤い電球をつけたのを珍しがって見に来る人が多い。悦三も大喜びだ。店の火鉢にあたりながら見える。

▼二月四日

今朝は近年にない寒さだが、晴れていて海はナギ。カレ網も皆出た。電気会社では大きな雪だるまをこしらひ、赤と青の電球をつけたのでなかなか面白い。人が沢山集つていて戸外は実に

賑やかだ。店は刺網の客が多く、今日も二・三〇〇間出た。トワイン、アバ縄などもずいぶん売れた。トワインは今年からはじめて売り出してみたが、なかなか評判がよい。綿ロープはトワインに押されて売れ行きが落ちた。今日は旧暦で大晦日、それに節分なので、夜はトロロの馳走がある。

▼二月五日

店は忙しい、今日も網が二四〇〇間程出た。積丹丸は三日の時化で破損したとのこと。積荷はほとんど陸揚げしたというが、わが家の網などは如何。西村へ照会したがのはつきりしない。幸治は小樽庁商へ入学するべく、規則書を取り寄せたが今日来た。これからは子供も中等教育を受けさせねばならぬので、なかなかゆるくない。

▼二月六日

起床八時、この頃は日がだいぶ長くなった。店は新しい刺網がかなり出る。古平では初めての品なので大威張りで売れる。現在八八で売っているが、様子を見て九〇くらいで売りたいもの

のだ。今日も本間要太郎一六〇〇間、山科六〇〇間で合計二二〇〇間出た。小樽、柴野、田小林の店員が来る。田さんは家に泊まる。夜、××(二字不明)主人が亡くなったので通夜に行く。

▼二月七日

起床八時、田さんは美国へ行かれた。午前中店は忙しい。刺網千間程出たが現金は少ない。実際のところ貸し売りの多いのには閉口する。吉井から刺網の注文があり、青森と東洋へ照会状を出す。古英丸が来る、谷からの綿糸、岩糸、ロープなど一五個、一千余円分が着いた。傘の兄さんが手伝いに来てくれて荷物をほどく。私は午後二時から火防組合で町内を廻る。どこの家でも刺網の準備で忙しい、一生懸命だ。四時帰る。夜、帳簿の整理をし一二時休む。

▼二月八日

起床八時、珍しく雨が降り暖気である。店は刺網の売れ行きが良く一四〇〇間出る。あと二万間と改良縄五〇〇〇間程手持ちがある、八分通りは売りたいものだ。学校で保護者会があり

妻が行く。唱歌会があったとのこと。午後二時頃から雨が雪に変わり、大吹雪になる。通行もできぬ程である。板戸を閉める。夜になり、大吹雪のため電気が止まること四回、その度にランプをつけて厄介なことだ。新聞によれば帝国議会が解散のため、総選挙は五月一〇日頃とのこと。そろそろ候補者の下馬評がでる。後志管内からは中西が確実、外にも候補者は四、五人か。岡崎主人も出るらしいとのこと、だがこれはウソだろう。

▼二月九日

昨日来の吹雪はずいぶんひどかった。今朝になってようやく止んだが、ひどい吹きだまりだ。店は刺網の客で相変わらず忙しい。今日も一三〇〇間出た、外にアバ縄も出た。東洋から「六ホン四五カケ五センチケンアルネ八三イカカス」と電信が来た。早速「ミタマニアワヌミアワセ」と返電する。(続く)



教科書のいまゝむかし

◇天皇制の国家を作り上げた日本は、はじめて外国との大きな戦争を体験しました。明治二七、八年の日清戦争です。そして、多大の犠牲を払って幸い勝利を得ましたが、この戦争での勝利の一因は、徹底した小学校教育にあるとされたのです。

それからは国の教育の路線は『忠君愛國』がスローガンとなつて進められて行くことになりまゝです。このことから宗教との問題が起きたり、検定教科書をめぐる一大不正事件などをきっかけに、検定教科書から国定教科書にするべきだ、という意見が強まってきました。

教科書を国定にすれば、転学した場合でも同じ教科書が使えるので都合がよいこと。また、教科書の値段が安くなるという点をあげて国定に踏み切りました。

明治三七年、第一期の国定教

科書が発行されましたが、最も力を入れたのは修身の教科書でした。

そこで先に出された『教育勅語』の中にある徳目を、できるだけ子供の発達段階に合わせで作ろう、また、教育上のモットーとでもいえるようなものを作りたい、と考えました。

例えばイギリスでは『ゼントルマン』を養成することを理想としているように、日本でもこれに類したような何か標語がほしい、というわけで『よき日本人』という項目をそれぞれの教科書の中に取り入れました。

しかし、この時期の教科書は
 ようやく日本の資本主義が盛
 んになってきた時代だったの
 で、新しい時代の教科書という
 面も持っていて、後に出てくる
 ような軍国主義の強いもので
 はありませんでした。

むしろほかの教科書に較べ

←アメリカ大統領リンカーン



を往復して、勉強したり、ランコムジはその後、父に従ひて他の地方に移り、野や山に出て、父とともに開拓に従事せしが、勉学の志は少しも、はれることなく、森林に入りて、強く間にも、服あれば、えさしの枝をもて、板の上に、文字を習はうと、いくたびとなく、讀みて、お

て、取り上げられて
いる西洋人が
圧倒的に多かつ
たのです。

リンカーンは
勉学・正直・人身
の自由など五課、
フランクリンは
勤劳・公益などで
七課、そのほかナ
イチンゲール、ワ
シントンなども
ありました。

国内で最も文明を感じさせた汽車については、その様子を懇切ていねいに教えています。新聞もまた文明の利器

として、この頃には生活の必需品として大衆の中に入りつつあつたやうで、教科書には次のやうになつています。

しかし、国定教科書は明治四三年の第二期からは、次第に国家主義の強いものへと変わつていきました。

「おやすみなさい」
そのときちょうど時計が九時をうった。

第二新聞紙。

都會の事も、田舎の事も、
千里あちらの他國の事も、

一目でわかる
新聞紙

あゝ。ちーほーな 新聞紙

「火事が多いぞ。ぬすとがある
こはい病氣がはやて來た」と

氣をつけさせる 新聞紙。
あー。しんせつな 新聞紙。

人に知られん 善事もうつし、
かげにかくれた 惡事もうつす。

鏡のよゝな
新聞紙

あゝ。明かな
新聞紙

拜啓。この度御店にて改良釜
專賣相成候由帝國新聞の廣告
にて承知いたし候早速ためし

善 惡 明 拜 承 知

火 新聞 事

充電のために

大 澤 文 子

きょうは立夏……と暦は報じた。背に受ける陽さしも快い。「うーん」……なんとなく躍動感に心がうずく。それなのにあー。

数年来風邪をひいたこともない私だったのに……。なんと高熱にうかされベッドに伏すこと一ヶ月余、右足は感覚もなし。部屋隅の洋ダンスにつかまりやと立ちあがる。

とつとつと廊下を歩き、ようやく居間のドアを開ける。

ふと窓越しに、杖をつき颯爽と道ゆく女性を垣間見た。

「ああいいなあ。杖があつたらしくに歩けるよねえ」

ひとり羨ましがること数分。

まあまあ、ウン十年つきあってきた脚ですものねえ、仕方ないか、でももう少し脚さんががんばって「ヨロシクネ」と、声をかける。

誰もいないひとり部屋に、あきらめきれない数分。なんとなく、先日、薬店から求めてきた

湿布薬を出してみる。これでも運動会にはいつも好成績をとっていた足なのにな。え。またも愚痴！

仕方なく再びベッドにもどる……。いつか私はうつらうつら夢心地の世界にひたっていた。

何故か？ わたしは海沿いの崖下道に立っていた。きつと沢江町に近い崖下なのであろう。冬こもりから一気に解放された崖下一面には、それこそ目も洗われる思いに咲きほこるカタクリの花。

ユリ科の多年草でうす紫の花は美しい。花言葉は『初恋』とか……。万葉集にもカタカゴ（堅香子）の名で歌われている。その根には上質の澱粉をふくんでいるため、昔は食用にもなっていたといわれる。

その可憐なうす紫にひかれ、初夏になると幾度足を運んだことか。

また崖上から流れ落ちる山水

は、冬になると朽ち葉のかけに凍りつき、初夏になってもなかなか解けない。

わが家の幼な子達はよく風邪をひいた。とくに古平っ子の次男はたびたび熱を出す。そんな時、わが家の離れに住む可児家のるみちゃんに声をかけると、よく手伝ってくれた。

昔、鯉場の頃使用したであろう子供用の「もっこ」をすばやく背負い、あの海沿いの断崖の下まで、水をとりに行ってくれたのだった。

くろぐろと積む朽ち葉をかきわけ、解けずに残っている水をとって来てくれるのだった。細かく砕いた水を「もっこ」に入れ、ガラランガラんと音をたててもどつてくるるみちゃん！ おかげで幼な子達の熱も下がり、いつもホツとするのだった。

「ありがとう、るみちゃん！ 今も感謝！」

ふと窓越しに賑やかな子供達の声。現実にもどりカーテンをひき、のぞいて見た。

ピッカピカの一年ぼうず達が、真新しいランドセルを背に軽やかなスキップをしながら、手を振ってゆくのが見えた。

入学時の緊張感とはほど遠く、自信に満ちた足取りがほえましい。

「気をつけてねー」と声をかけると、

「ハイ！」

元気な声と共に、手に下げていた袋をふりふり、はや角をまがり走り去っていつてしまう。

いつものことながら、登校のわが子らを見送る若い母親達が二、三人街角に立ち、楽しそうに話しを交わしているのを見かける。

「うちの子はねえ、人参とピーマンが嫌いなよ！」

「うちの子もなのよ！」

「どうしたらいいのかしらね！」

若い母親達は、そんなことを話し合っているのかな……。とほほえましく思い、そつと窓を閉じた。

ふとわれにかえり、熱の下がりかけたわが身に問いかける。

「まあたまに休むのもいいよねー充電のために……」

さあ、これからも音楽を愛し、花を愛し、そして命終うまで自分を愛してゆこう……。か。日記の端に記しペンを描いた。

◇古平開拓出張所 続き

丸山下の埋め立て

鯉の豊漁で活気づくと、古平に定住する人や出稼ぎに来る人が次第に多くなってきましたが、漁場や特に干場に広い用地が使われることから、住宅地が不足してきました。

当時、丸山下は海が入り込んでいて、古平湾は来航する船にとつての停泊地となっていました。周

蝦夷地から北海道へ 地方自治の移り変わり

りませんでした。

願い人 氏 名

身元引受人 氏 名

辺は湿地帯でしたが、明治五年、先に岡田家から漁場の権利を買い取っていた種田徳之丞が、自費千円余りで川をさらに掘削して、兩岸五七〇日程を石垣で築き、この湿地帯二万九千坪余りを埋め立てしました。

これにより種田徳之丞は、開拓使から目録金三十両の手当てと賞詞を与えられました。

この埋立地は現在の御崎町と、

隣接する丸山町の一部ですが、当初の図面では入舟町谷地となっています。その後の区画整理で丸山町となりましたが、昭和の時代になっても年輩の人はこの辺りをヤチ(谷地)、なまつてヤジと呼んでいました。

古平への移住と人口

この頃は、古平で越年する人については届け出をしなければな

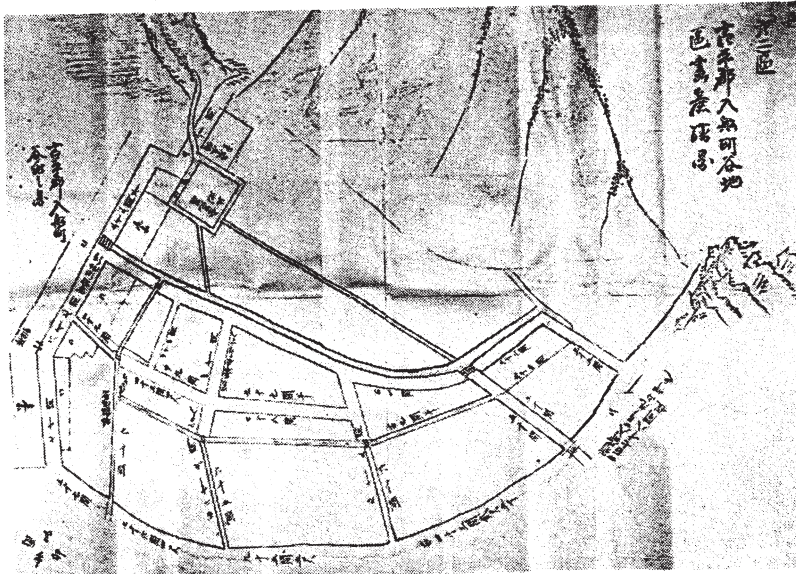
いをするというところもあったようです。

明治五年当時の戸口は、大正七年の古平沿革誌によりますと、戸数二四二戸、人口一四一六人(北海道の総人口二二、一九六八)

古平・美国二郡を所轄

明治四年、開拓使古平出張所が古平・美国二郡を所轄することに

←古平郡入舟町谷地区画図



なり、北川誠一小主典に替わって、余市詰から鈴木金吾(藤原近長)少主典が古平詰となりました。

←古平詰の辞令

二二

古平詰
余市詰から鈴木金吾
少主典が古平詰となりました

二月廿八日

古平詰

美国積丹両郡抱
其郡所轄可致事

ところが鈴木少主典は翌年病氣になり、古平郡出張病院で療養していました。五年亡くなりました。葬儀は神式で行なわれ、古平墓地南側の高台の一角に『鈴木藤原近長神霊』の墓碑があります。

※平成一五年

秋、この鈴木家の

← 鈴木藤原近長神靈墓碑



縁戚に当たるといふ、現在、沼津市に住んでいる方が、北海道観光旅行で積丹半島を訪ねられたとき、墓碑のことを知っておられてバスごとお参りに立ち寄られたことがありました。ところが、あいにく雪のせいか墓碑が前に倒れていました。当方にある写真や文書をコピーして上げましたが、バスに同乗されておられた方も一三〇年も前の歴史の一端に大変興味を持たれたようでした。

北海道の行政区画

明治維新という国の大きな変革があり、はっきりした国の方針が定まらないこともあって、行政も目まぐるしく変わりました。

ましてや、開拓の始まったばかりの北海道では本州との違いもありました。開拓使が置かれて北海道となつてからも、開拓使だけ

の力だけでは広く、未開地の多い道内を管轄することが難しかったので、それまでの幕府時代のいきさつから、特に奥州の各藩や政府の官庁などが各地を管轄していて、開拓使の管轄地は一一か国に分けられた内の石狩・後志・上川・渡島周辺でした。

明治五年、開拓使は全道一一か国と樺太を合わせて六大部に分け、所属する国・郡を画定しました。これによつて、ようやく開拓使による全道の統治体制ができたのです。(樺太は樺太支庁)

本庁と支庁の画定により、石狩国と後志国のうち岩内・古宇・積丹・奥平・古平・余市・忍路・高島・小樽の九郡が札幌本庁の管轄となりました。

戸町・副戸長・総代制

明治五年四月、本州にならつてそれまであつた庄屋・名主・年寄などという村役人の名称が廃止されて、戸長・副戸長と改称されました。

↑ 辞令

古平郡副戸長
戸長申付書

明治六年九月十五日
開拓使

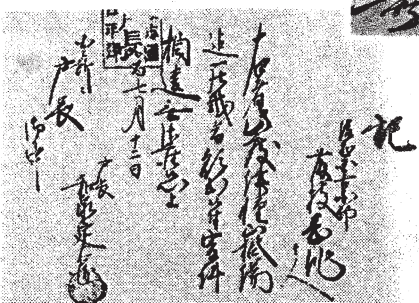
古平出張所

開拓使
古平出張所

明治5年 ↓ 全道11か国を札幌本庁ほか4支庁に画定



↓ 戸長発行の通行手形 (明治六年)



札幌通信 第30信

ハマナスよ また逢う日まで

吉 川 義 雄

ウロ覚えの記憶だけを頼りに、臆面もなく何度も描く花に「ハマナス」がある。

「ハマナス」とも言うらしいが、真つ向から花に傷のつく呼称でもないから、まあどちらでもいいかと私はいたつて吞気だ。

少年時代の古平で、私の行動半径では遭遇できない花と思つていたら、なんと毎日のように通つていた丸山の三番岩近くで、ついに歴史的な……私の生涯ではホント感動の初対面となつた。

あの頃、古平港のケーソンはほとんど海中に並べ終わり、岬の崖を崩してはそれを選び、沖側に運んでは、築港を強化するため投げ込んでいた。

真夏の快適な遊び場は、一番岩の海岸に綱を張られ、その奥には一歩も入ることが許されなかった。

毎日何度もハツパの音がとどろき、丸山岬は無残にも少なからず変貌していった。

立ち入りが解除されるのを待ちかねたように、私は三番岩まで直行した。

三番岩の真後ろ、見上げる高さの崖に、少年達が勝手に名付けていた美しい環状節理があつた。直径五メートル程の「ジャノメ岩」がきれいに無くなつていた。

情けなさど口惜しさで、暫く美しいジャノメ岩のあつた辺りを見つめていると、崖の崩れた下辺に、何やら赤い花が風に揺れているのが見えた。

危険を覚悟で、私は花に呼び寄せられたように、ハツパで崩れた岩の山をよじ登った。

ようやくの思いで私の手に触れた花は、初対面だというのに「ハマナス」だとすぐに分つた。

岬の崖の中腹にいつから咲いていたのやら、ジャノメ岩は親しく見上げてはいたが、その下方に、彼女がひっそりと岩の隙間にすがりついていたとは。

まあ、ハツパ以前は、発見しても側にも寄れなかったことは確かだつた。

花はたった一輪、随分迷つたあげく、私はトゲでさんさん顔をしかめながら、手折ることに成功して家に持ち帰った。

花の咲いている場所はあまりにも危険なところだから、ウソにウソを重ねて母に報告し、ようやく花びんに落ち着かせた頃には、生気を失つていた彼女はあつさり枝から離れ落ちた。

以来、何年も何年もハマナスとは遭遇の機会がなく、絵や写真ばかりでもとび上がる程喜んだりしたものだ。

原生花園の女王は、石狩の海岸にも大群落があるとも聞かされてはいたが、ついぞ再会の機会を逃し続けていた。

ところがである。まさか札幌の大通りに、いとも無造作にハマナスの大群が植えられていたとは。

感動で、何度も何度もウスラバカと思われる程、彼女の名を呼んだ。

地下鉄大通りの南降り口はめつたに使用しないところだが、エレベーターがあるので、その恩恵にあずかるつもりだつた。

その昔、崖を登つて彼女の傍まで行つた少年が、数十年の年月を経て、エレベーターで地下道に降りようとして、またも彼女と遭遇したのだ。

いつ頃から植えられていたものか、自然石を無造作に積んだ数メートルの舞台に、赤いハマナスの花々がごく自然に、伸び伸びと咲き競つていた。

あの少年の日から、札幌の書店時代、戦時の海軍時代。そして再び復員後の古平時代。

想えば、再び彼女に逢うまでの、自分でもアキれる程の不思議な遍歴の日々だつたことよ。生命は不思議な程大切だ。地球の一角にしがみついて生きる、正当な努力を失わない限り、いつかまた逢う日が来るはずだ。

〈訂正〉 札幌通信4月号28信より

月号29信と訂正いたします。

戦中

泣き笑いの
樺太漁場体験記

戦後

吉野慶一郎

突然のソ連軍からの通告—命令というのは、

「真岡港に漁業用の塩を積んだ大型貨物船が入港する。その陸揚げ作業の使役に、一五名を五日間宿泊の用意をして出勤させよ。宿舎は用意する」というものでした。

腹立たしいが今は「まな板の鯉」、仕方なく急遽、漁業者で一団体を結成し、クリスマスイブの朝、汽車で真岡の指定場所に行きました。早速に案内された場所は、北真岡海岸の雪野原の古びた番屋でしたが、内部は何も無い本当のガラ家でした。

これには一同あつけにとられ目を白黒、案内人に、

「これでは寝ることもできない。どうするのだ」と

と言うと、彼は、自分はわから

ないから、事務所聞いてくれと、逃げてしまいました。事務所へ行つたところで、どうせたらいい回しにされるのがオチだと判断し、直接、日本の真岡漁業組合に駆けつけ、事情を説明して救援を依頼したのです。

それは一大事！ とばかり快く援助を引き受け、石炭やストーブをはじめ、米、みそのほか野菜や冷凍魚などの食料品、それに炊事道具まで、細かい心遣いで、瞬く間に大量の必需品を取りそろえてくれました。やはり日本人同士の厚情に、ただただ感謝の念でいっぱいでした。

これらの品を番屋に運び入れ、その後は近隣の空き家から古材を集め、総動員で寝室や炊事場などの造作をし、ストーブで暖まることができました。

表の除雪をしていると、ふと前方近くの雪山の辺りに、数人の女性らしい人影が見えたので近づいて行くと、近所の主婦連中らしく、雪山の中から何やら掘り出しているのです。

すると、その中の一人から、突然「吉野さん」と呼ばれてビックリ、顔を見ると今年の冬、私のすけそう漁船の機関長をしていた人の奥さんでした。

思わぬところで再会、互いに無事を喜び合い、何か目の前が明るくなりました。

「そここの雪山の下には缶詰が沢山埋まっているけど、誰も人は来ないし、宝の山ですよ。吉野さん達も持って行つたらいいですよ。」

皆その気になって、宝の山へ入って見て驚きました。カニ、鮭、鱒、鯖など種類も多く、しかも全くの無傷でした。つい欲を出して持てるだけ持って帰り、早速、夕食に賞味し、残りもしばらくの間は食前に上りました。

戦前は豊富な資源に恵まれ、北真岡海岸は漁業と水産加工の

産業地帯として、本州の大手会社が進出して、塩干魚、缶詰、製油、フィッシュミールの工場

と、冷蔵庫が軒を並べて競い合っていたところでしたが、終戦後の八月二十日、ソ連軍の無謀な艦砲射撃で、一瞬にして廃墟と化してしまつたのです。その

残骸がいま全面雪に覆われている光景を目の当たりにして、この地区も想像も及ばない災害をこうむっていることに、憤りと

悲しみを増しました。戦争こそ残酷で、全く無意味なものであることを思い知らされました。

冷静に考えると、大喜びで拾つた缶詰、宝の山の正体に思い当たり、罪悪感と後悔の念が起こり、再び足を運ぶまいと心に決めました。

翌朝、昨日の係員が全く平気な顔をして、仕事場に案内すると迎えに来たのです。炊事係兼留守番を一人残して、現場へと向かいました。

すでに貨物船は岸壁に着いていました。どこから来たのか、船倉には赤味を帯びた、粉碎された岩塩がはだかで積み込ま

「

連作

古平まで

17

坂本 甚 衛

—地質調査の旅(5)—

再び言うが、その事件は突発的だった。その日朝八時半、私はD・P内の地下水深度を測定、パーカッション機を始動させた。一日の作業工程が開始されようとしていた。

モイレ城閣や水産博物館の未だに建築前であるモイレ崎は、からりと繁茂した闊葉樹が微かに色づき出していた。河の上をそよそよと風が渡り爽やかな初秋の朝だった。日本海の高鳴りが地虫のように遠く鳴っていた。

平尾は七輪に木っ端を入れて上に炭をのせ、ポリタンクの灯油をもみくちやにした新聞紙に浸した。下地にしたその紙に百円ライターで点火した。火は勢いよく燃え上がった。上に清水

金物店から昨日買っておいた、駄郎引きの紺色で吸い口のついた容器に、固形のバラフィンを入れ火にかけた。容器の正式な名称は知らないが、とも角この入れ物は重宝した。宴会で大量の酒を徳利に小分けする時などに使う代物だが、昨日の夕方一回だけコア入りの真鍮管にバラフィンを注ぎ込んでみた。

コアと管との隙間にもむらなく充填し、これなら試験所で輪切りの試験や、強度の加圧押搾試験でもある程度耐え得るのを痛感させた。七輪の炭を熾すと、平尾は郵便局へ行つて来ると言っていないくなった。毎朝定期的に日報を投函しなければならぬからだ。

目前の仕事にかまけて私は七輪のことは忘れていた。順調に炭火は熾きっているとばかり思っ

ていた。ところが消えかけていたらしい。灯油のせいで威勢よく燃えた火は、ややもすると灯油だけ燃え、木っ端に着火せず消えて終う時がある。この場合もそうだったらしい。但し、火種はまだある。火のつきが悪いのを目にした加我谷が側へ行きバラフィンの容器を下ろした。しかしあとで気付いたのだが、次にとつた行動が何とも間抜けな早とちりだった。

発動機の傍らからオイル缶を持つて来るや、蓋を取り炭火に振りかけたのだ。一気に引火すると辺りは火の海になった。まるで火焰放射器である。黒煙がもくもくと宙を焦がした。仰天した彼はあつと叫びオイル缶を地に落とした。

咄嗟に錯乱状態に陥った加我谷は長靴の先でオイル缶を河面に蹴飛ばした。火は河一面を覆い悠々と流れて行く。オイル缶の中身が灯油でなく、ガソリンなのは人夫一同知っていた。加我谷とて知らぬ筈がない。いかに辺鄙な白岩町育ちであろうと、漁師の息子ならエンジンも

れていて、それをソ連人が網のもっこに入れ、ウィンチで岸壁に降ろしたものを、私達日本人がそれを整理するのが仕事でした。

何千トンあるのか、いつまでこの作業が続くのか全く見当もつきませんが、冬の海風は冷たく、身体を動かすことが最良の手段と考え、まずは適当に時間まで働きました。

作業も四日目になって、ようやく船倉の底が見え始め、明日で終了との見通しがつき、その夜は各自持参の酒などを出し合つて、まずは前祝いの祝杯を挙げました。

翌日は皆張り切つて、時間に合わせて最後の仕上げも立派に終えてソ連側に引き渡し、これでソ連側も納得の様子でした。さて、いざ帰ろうとしたところ、突然、

「帰るのは待て！」

と係官が叫んだのです。みんな一瞬立ち止まりました。

△ 続く △

訂正 五月号・最後から2行目の「菅田」は「姿」の誤りです。

いじくる関係上、ガソリンが極めて引火し易いのを知らないほ
うがオかし。

水に浸せば消えるという観念上の判断ミスが常識を狂わせたといえようか。お陰でこちらら何とも慌ただしい目に合った。

橋の欄干や土台に飛び火を、着ていた上衣を脱ぎ叩いて消火しなければならぬ。言葉にならない声を発しながら必死である。

二人の入夫も同様だった。

橋上を通り掛かった人々が口を開けボカンと見ている。その間、当の加我谷はどうしていたかという、橋の根元に舫っていた磯舟に乗り、流れ下る火を追って川下方向へ向かった。漁師だけあって櫓を操るのは上手いものだ。己が失策に泡喰った加我谷の顔は凝固した能面のようになりついている。

折しも海は大時化で、旧協会病院並びの河口港には一面に漁船が繋がれていた。ようやく橋上の火を消した私たちは、水上の火を追っかけて行く加我谷を手汗握る思いで見守った。すると偶然にも漁船の近くまで流れに乗って降っていた火は、油

が尽きたとみえ自然に消滅したのはもつめの幸いだった。

戻って来た加我谷に私は笑いながら言ってみた。

「加我谷、お前あの火をぼつかけて行つて一体どうする気だったのよ」

彼に返事はなく緊張にこたえた。ような表情を見せただけだった。もし火が漁船の船腹に燃え移ったとしたら、彼に一体どんな消火方法があったのか？ 恐らく私らのように上衣を脱いで叩き消すよりてがなかつただろう。そんなやり方で燃え盛る水面からの火焔が果たして簡単に消えるものかどうか。

運悪くというか、良く、というか、この日は札幌から土木試験所長と所属する調査課長及び技師長が、私と平尾が行う真鍮管のコア採取状況を視察に来ると連絡があり、昨夕より丸福旅館(現商工会議所)に投宿中だった。火事騒ぎが収まった九時過ぎになって彼らが現れたのはラッキーというよりない。私も平尾も口を拭って知らん顔だったのは言うまでもない。もしあの騒動の最中、上司連中が来たら

どうだったろう。入夫の一人が惹起した過ちにしろ、すべて使用する側の私と平尾の責任になる。大目玉を喰らい暫くはしゅんとして小さくなっているより仕方なかったのでは、と思う。

☆ ☆ ☆

以上で第一話を終わる。どうやら紙数も尽きたようである。ところで現在の私はすっかり身体がいかれて終い、先日より透析に週三回通い、一日四時間の「命の洗濯」が必要となつてしまった。一日四時間に往復の時間を加えるとそれだけで一日が潰れて終う。

石狩市の畏友葛西庸三氏や、余市町の『余市文芸』編集委員である武井幸夫氏など、かつての知人、友人は病気に敗けず気力で克服し、尚も書き続けられんことをといった勉勵の便りを下さる。それに支えられ何とか意識を奮い立たせ今まで来たが、どうやらそれも限界のようである。所詮、老兵は消え去るのみか。

一年半に亘った私の拙い連載もこれにて終わる旨、ご了承戴きたい。

編集雑誌記

▽大雪のあとも、それに引きずられるような寒さのせい、早いサクラは縮んだ中でポツリポツリと散っていきました。一方では久しぶりの晴天に、タンポポが爆発でもしたように一斉に咲きそわい、わが世の春を謳歌しているようです。ようやく初夏、いよいよ北国の好季節を迎えました。

▽高野名幸作さんの日記も百回を数えました。古平の昔をナマで知ることができ、老齢の方には自分の生きてきた時代と重ね合わせ、ひとしおの懐かしさがあるようです。また、当時の貴重な資料としても、関係者から大きな関心を持たれています。今回でやっと大正一三年に入りましたが、日記は昭和三十七年まであります。まだ三八年余りが眠っています。さでどうしようか？ と思案中です。▽体調不良を押して、古平に移り住んでから、一七回にわたって健筆を振るわれました坂本其衛さんが、疲労もあり、ひとまず休養されることになりました。お礼と共に紙上での再会を期待し、今後のお健康を切に願っております。

ソ連軍の国境侵攻へ続き

それから加藤と二人で、大急ぎである米を全部炊いて各班へ配った。それを藤

山曹長に報告し、

いっしょに行く伝

令二名は、初年兵

の山家丑太郎と中

村正道にしていた

だきたいと申し入

れた。

山家と中村は初

年兵だがよく働き

気がきく、相棒の

須藤も連れて行く

ことを考えたが、

彼には持病がある

ので無理だと思い

指名しなかった。

山家と中村を呼ん

で、「どうだ、二

人共俺といっしょ

に大隊本部へ行っ

てくれるか」

「連れて行って下さい。お願い

します」これで話は決まった。

早速、二人の所属の班長に、藤山小隊長の許可を得ているの

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

30

橘

義

春

で了解をお願いしますと。両班長は不満だったらしいが強引に納得してもらった。

幕舎では移動準備でこつた返

していたが、私の

私物は戦友二人が

片付けてくれてい

た。急いで完全軍

装して山家と中村

を連れ、藤山小隊

長のところへ改め

て申告に行った。

小隊長は「三人

共頑張ってくれ、

橘、二人を頼む」

と言って、私達三

人を幕舎の入口で

見送ってくれた

が、これが藤山軍

曹との最後の別れ

になった。

途中で中隊本部

に寄つたら、同年

兵の佐藤清も、暗

号手として大隊本

部へ配属になるという。四人で

加藤曹長に申告を済ませ、私は

個人で、炊事班長の下向軍曹に小隊炊事の食料分配の経過を報

告し、お別れの挨拶をした。

「今まで本当によくやってくれ

た、今度は大変なことになる

そうだ。大隊本部で頑張って

くれ。ご苦労」

下向軍曹とも、これが最後の別

れになった。

小雨が降り出したので、四人

共携帯テントを頭からかぶり山

の坂道を下って行った。

私の頭の中には、何かすつき

りしないものがある。本当にソ

連軍が攻めて来たのだろうか、

ソ連とは不可侵条約を結んでい

るはずだが、どうもおかしい。

戦闘が始まったというのに敵の

飛行機も飛んで来ないし、砲声

も聞こえない。山は静寂そのも

ので、浮き世の物音は何も聞こ

えない。こんな戦争ってあるの

かなあ——？

どうも実感が全然わかない。

いつもながらの非常呼集か、大

規模な部隊の移動演習でもして

いるような気分です歩いて行く

と、仲谷伍長が坂を上がって来

た。大隊本部へ命令受領に行っ

て来たらしい。「仲谷班長殿、状況はどうで

すか」

「やはりソ連軍は国境を突破し

て来た、本物だ。皆はどこへ行

くんんだ」

「大隊本部の要員として行くところ

です」

「そうか、気をつけてナ」

「ありがとうございます」

と、仲谷伍長と別れたが、

「これは大変なことになったぞ！」

樺太には飛行場はあるが飛行機

は無い。戦車も無い。実際に戦

つて勝てるのだろうか？ とい

う疑問が頭をよぎった。そのと

き突然、中村が、

「自分の友達がすぐその飯場

にいます、ソ連軍と戦争が

始まったことを知らせていいで

すか」

「それは駄目だ。俺達にもまだ

はつきりしたことが分からない

し、軍のことをやたらに地方人

にしゃべって、あとで問題にで

もなつては困る。気持ちはわか

るが止めなさい」

と、中村を納得させ、雨の中を

大隊本部へ急いだ。

短歌

吉平町岬短歌会

ながく病み命盡きたる義妹いもうとの笑顔が浮かぶ桜を見れば

池田 テル

枯色の落葉松つづくニセコ路に咲き初むこぶし振り返り見る

鈴木 時子

普通ひし思ひ出多き群来の山に摘みしあざみは天ぶらにせむ

竹内 コト

柔らかき光りをうけて広がれる波の音にも春の海色

田中 香苗

春の日を波止場の岸をゆつくり行く見知らぬ釣人に話しかけつつ

寺内 りょう

のんびりと歩むも花壇は塀のうち淋しくもありつつじの盛りを

寺内 りょう

旭山動物園に従きゆくを目標に歩む一キロの道

東 美知

光りつつ寄せくる波のさらさらと音のやさしも春の磯辺は

堀 典子



吉平俳句会

水温む稚魚放つ日の遠からず 斉藤波留

春灯や神威岩にも灯したく 山口悦子

剥製の雉一声を叫ぶかに 越野敏雄

嫁ぐ子と居て無口なり月朧 大和田絵伊

春がすみ投げし小石の水の音 高橋重子

クロッカス庭に目覚の日を含み 仲谷比呂古

おぼろ月湾の闇夜を動かざる 室谷弘子

花の芽にそつと寄りそふ子猫かな 泉清三

公園の樹木の葉ゆれ風光る 外山俊久

花便り空の青さを乗せて来し 渡辺嘉之

遠き空光やさしき春の星 堀典子

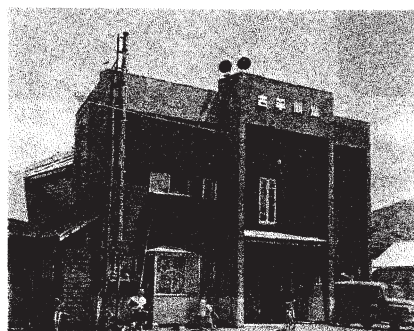
網番屋繕ふ窓の春明り 本間寿昭

春光を刻みし波を眩しめり 越野清治

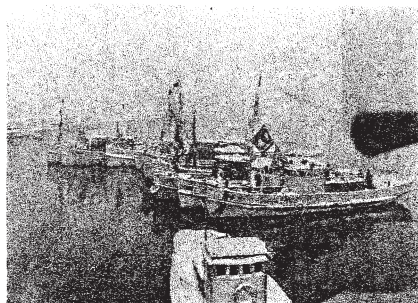
古平町史年表

昭和13年(1938)

- ▲古平中央劇場から夜半に出火して全焼する、レビュー団が公演中であつたが死傷者は出なかった
- ▲古平信用組合(略称)が建造し組合員に貸与した漁船で、スケソ漁獲高の優秀な漁船に組合長から賞与が出る
- ▲紀元節の式典に合せて戦勝祈願祭が行われ、古平小学校では全校児童が神社参拝をする
- ▲厳島神社裏山、通称弁天さんの坂で古平・美国両小学校の対抗スキー大会が行われる
- ▲出征軍人家族慰安会が古平小学校で行われる
- ▲国家総動員法が公布され、戦争遂行へ向けての行事も多くなる
- ▲古平産業組合が婦人部を結成する
- ▲全道火災予防デーに消防組・青年団・火災予防組合員らが町内を回り、模擬火災訓練も行なわれる
- ▲町内会ごとに空襲を想定した家庭防火団が組織され、古平警察署で発会式が行われる
- ▲結核予防デーに衛生組合や警察が町内を回り、各戸にピウを配布する
- ▲イワシが大漁で古平小学校が臨時休校をする、イワシは隔年で大漁と不漁を繰り返しているという
- ▲支那事変1周年記念日に、琴平神社で武運長久祈願祭と慰霊祭が行われる
- ▲漁村産業組合経営協議会が役場で開かれる
- ▲古平町を管轄する余市職業紹介所が、国民職業指導所余市出張所と改称する
- ▲夏休みに小学校高学年の児童が勤労奉仕で野草刈りをし、農家の堆肥作りをする
- ▲北海道庁長官石黒英彦が、視察のため来町する
- ▲北海道全域に1週間にわたって特別灯火管制が行われ、夜になると町中は真っ暗となる
- ▲戦火の拡大により今次大戦の初めての戦没者が出る、渡辺仁太郎・後藤敏一二柱の町葬が神式により、古平小学校運動場で行われる
- ▲石炭配給規制規則が公布され、家庭の燃料用石炭が切符制になる



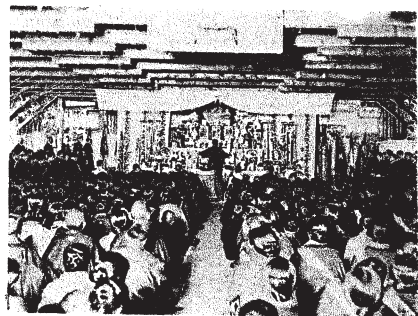
↑古平劇場(昭和31年)



↑古平信金が建造した漁船



↑弁天さん裏山でスキー練習風景



↑戦没者の町葬(古小運動場)